

## Sociolinguistics: A Very Short Introduction

John Edwards, New York: Oxford University Press, 2013, 133 pp.

### 書籍紹介 1

Paul A. Lyddon



This slim volume is among the newest additions to Oxford University Press's *Very Short Introduction* series, a collection of concise general overviews now comprising nearly 500 titles on a wide range of topics from accounting to world music, each written in 100 to 250 pages by a scholar in a relevant field. According to the publisher, each book in the series is meant to provide a "trenchant and provocative, yet...balanced and complete" examination of the key issues, and John Edwards' impressively succinct survey of sociolinguistics is no exception.

The book comprises eight chapters of roughly equal length, each building on the last not only to illustrate language's dual role as both functional and symbolic instrument but also to underscore its vital importance in establishing and maintaining group identity.

While a number of other excellent primers on the subject are available, the present text features three uncommon elements that deserve particular mention. First, it offers alternate perspectives on

the rarely contested topics of discourse analysis and language preservation. Second, it devotes considerable attention to historical linguistic evidence of changes in social attitudes. Finally, it includes an engaging discussion of individual and group naming practices.

Although most of the linguistic examples throughout the text (especially those involving diachronic comparisons) rely on English and other Western European languages, Edwards is careful to draw parallels with relevant phenomena from a variety of cultures around the world. His use of a small number of foreign expressions without translations may prove a slight annoyance for those with no background in a Romance language, but it is only a minor quibble.

No such brief text can be all things to all people, but Edwards' remarkable effort offers something for both inquisitive generalists and experienced linguists alike and, as such, it is well worth the read.

## グッドワークス!

フィリップ・コトラー、ナンシー・R. リー、デビッド・ヘッセキエル 共著  
ハーバード社会起業大会スタディプログラム研究会 (翻訳) 東洋経済新報社  
2014年9月刊 313ページ

青木 慶

### 書籍紹介 2



21世紀以降、企業のグローバル化やインターネットの発達に伴い、改めて企業の社会的責任 (Corporate Social Responsibility; CSR) が注目されるようになった。グローバルな企業活動に伴う環境問題や格差問題が、インターネットにより瞬時に世界中に拡散される現代において、企業には社会の一員としてそれらの解決に積極的に取り組む姿勢が求められる。ただし持続可能性を実現するためには、社会と企業の双方に価値をもたらす共通価値の創造 (Creating Shared Value; CSV) が必要であるというのが、ハーバード大学のマイケル・ポーター教授らの主張である。社会的課題を解決することで経済価値を生み出すことができれば、自ずとその活動は持続するという考えである。

本書は「善いことをして良い実績を残す」ことを実践しようとする企業への、マネジメント・ガイドである。例えば、社会的

課題の認知を向上させる Cause Promotion、製品やサービスの購入と寄付活動を関連させる Cause Related Marketing、消費者の態度変容を促す Social Marketing など、新たなマーケティング手法を多くの事例とともに紹介し、それぞれのメリットとデメリットを挙げている。いずれも、企業が環境問題や社会問題に取り組みつつ、自社のビジネスを向上させる活動である。

本書はビジネス書として興味深いだけでなく、豊富な事例を通して世界では何が問題となっているのかを考えさせてくれる1冊である。例えば、途上国における飢餓が大きな社会的課題である一方で、先進国においては肥満が社会的課題となっている。企業人のみならず、多くの人にとって本書の提示する課題は一考に値するものである。

## 感じのよい英語 感じのよい日本語：日英比較コミュニケーションの文法

水谷信子 著 くろしお出版  
2015年8月刊 138ページ

大塚 朝美

### 書籍紹介 3



英語で何かを伝えようとする時、我々は日本語のもつニュアンスをできるだけそのまま相手に伝えたいと考えるだろう。それはつまり日本語で話すのと同じように「感じよく」英語でも話したいと考えているのではないだろうか。しかしながら、別の言語で母語と同じニュアンスを伝えることはそう簡単なことではなく、「感じよく」話すためには、背景にある文化的な知識が必要である。

本書は、英語、日本語それぞれが持つ文化的背景を踏まえて、お互いに「感じのよい」、より「自然」と受け止められる言葉の使い方やコミュニケーション方法について指摘し、論じている。第1章では、英語でしばしば行われる「呼びかけ」の意味と、文末のイントネーションの差による受け止め方の違いを論じている。第2章では、日本語の補助動詞(「いく」「おく」な

ど)が付け加える日本語独特の「場の共有」感覚を解説している。普段何気なく使用している日本語の表現には、無意識に「寄り添い」あるいは「共存」の感覚が込められているという指摘は興味深い。第3章は、あいづちの頻度や未完文末について取り上げている。日本語のあいづちは英語話者にとっては interruption と捉えられて不快感を示す一方、日本語話者にとってはあいづちの無い会話は不安に感じられる。第4章と5章は、曖昧さを受け入れ、「場づくり」に時間をかける日本語話者と、明確さや個々人の独自性を重んじる英語話者の言語使用の違いを取り上げている。具体的な会話例や意見の紹介なども多くあり、身近で読みやすい内容となっている。